

月刊

2022

1

公論

世界の視点で
情報を発信する
総合誌

**岸田首相はわかりやすい言葉で
明確な国家戦略を国民に語るべき**

提言 本誌主幹 **大中 吉一**

連載 **政界展望** ジャーナリスト **鈴木 哲夫**

新体制の立憲民主党と派閥抗争前夜の自民党

先人に学び、日本を哲学する⑫ (株)人間と科学の研究所 所長 **飛岡 健**

日本の再成長戦略の為に経済不況の正しい分析の仕方

TOPインタビュー⑰ 因幡電機産業株式会社 代表取締役会長 **守谷 承弘氏**

企業としての提案力の醸成と自社ブランドの構築が成長の鍵

琉球舞踊 組踊立方
宮城流 師範

宮城 茂雄氏



日本カバヤ・オハヨーホールディングス株式会社
代表取締役社長

野津 基弘氏



**リレー
対談**

**琉球王朝の
歴史伝統文化を
軸としてある
企業活動**

自由と自立 愛情と覚悟の精神を貫いた祖父

3

提言

岸田首相はわかりやすい言葉で
明確な国家戦略を国民に語るべき

本誌主幹 大中吉一

30

連載◎政界展望

新体制の立憲民主党と派閥抗争前夜の自民党

ジャーナリスト 鈴木哲夫氏

36

TOPインタビュー⑱

企業としての提案力の醸成と
自社ブランドの構築が成長の鍵

因幡電機産業株式会社
代表取締役会長 守谷承弘氏

6

リレー対談

琉球王朝の歴史伝統文
化を軸としてある企業
活動

自由と自立 愛情と覚悟の精神
を貫いた祖父

野津基弘氏

日本カバヤ・オハヨーホールディングス株式会社
代表取締役社長

宮城茂雄氏

琉球舞踊 組踊立方
宮城流 師範

64

先人に学び、日本を哲学する⑫
日本の再成長戦略の為に
経済不況の正しい分析の仕方

(株)人間と科学の研究所 所長 飛岡健氏

62

連載◎医療最前線 長尾和宏の「生」と「死」
3回目や小学生への接種を至急再考すべし
「ワクチン後遺症」の現場から

医学博士 長尾和宏

64

連載◎先人に学び、日本を哲学する⑫
日本の再成長戦略の為に
経済不況の正しい分析の仕方

個人間と科学の研究所所長 飛岡 健

77

津カントリー倶楽部
Next Golf Community ゴルフ場は地域の宝物!

78

連載◎未病漢方始め③
漢方薬は変異ウイルスにも対応

修琴堂大塚医院 渡辺賢治

82

株式会社オンワードホールディングス
実店舗とECが連動した新業態「OMO型店舗」を出店拡大

84

株式会社セブン&アイ・ホールディングス
天美エリアから遊び心のあるあたらしさを発信!

82

連載◎グリーン交感線
偉大なるゴルフアーノルド・パーマーとの邂逅

本誌主幹 大中吉一

3

提言

リレー対談

《時論公論》

18

I 立憲民主党はよみがえるか

ジャーナリスト 泉 洋海

20

II 岸田内閣の「新しい資本主義」聞き上手なトップの戦略は……

経済ジャーナリスト 八雲豊彦

22

III 国会臨調で国会改革を、51日100万円の文通費に怒り、

政治アナリスト/元杏林大学教授 豊島典雄

24

IV 脱炭素問題で見えてくるもの

山本玲子

26

V そもそも環境問題は、人類滅亡の危機なのでは?

ジャーナリスト 三木寛郎

28

連載◎欧州からニッポンを見る(316)

デジタル田園都市構想は人々の生き方のリセットにあり

在仏コラムニスト 安部雅延

30

連載◎政界展望

新体制の立憲民主党と派閥抗争前夜の自民党

ジャーナリスト 鈴木哲夫

36

シリーズ TOPインタビュー⑱

企業としての提案力の醸成と自社ブランドの構築が成長の鍵

因幡電機産業株式会社 代表取締役会長 守谷承弘

46

列島いんふおめーしょんPLUS

54

列島いんふおめーしょんPLUS 地域企業特集
第1回「地域から宇宙へ」

58

連載◎防災の世界を解剖する(53)

都市部で脆弱化する防災力、マンション居住者の防災を考える

一般社団法人AODI災害研究所 理事長 伊永 勉

「月刊公論」電子版がスタート。
下記QRコードをご参照ください。
[URL]
<https://www.kohronarc.jp/>





未病漢方 事始め

—第3回—

漢方薬は 変異ウイルスにも対応

修琴堂大塚医院 渡辺賢治

前号で感染症を例に取って漢方の特徴である「病気ではなく、ヒトを治す医療」について説明しました。新型コロナウイルスでも多様な症状を呈しますので、使う漢方薬も1つ2つではないのです。なんだか分りにくいなあ、と思われると思います。しかし、生体に援軍を送る、という漢方の治療原則には利点もあります。

まず1つめは、カラダの反応を援護するのが主ですから相手を問わない、ということ。ですから1800年前に、傷寒(腸チフスに近い病気)という病気に対して書かれた『傷寒論(しょうかんろん)』の原則が、インフルエンザにも新型コロナウイルスにも応用が可能なのです。さらにいうと、インフルエンザウイルスも新型コロナウイルスも変異を起しやすいのですが、変異

株ができて漢方の治療原則は変わりありません。

2020年4月の第1波の時に経験した新型コロナウイルス患者さんは、39℃の熱が続く、酸素飽和度も低下してきている状態でした。今回の新型コロナウイルス治療に対して、武漢市で多用された「清肺排毒湯(せいはいはいどくとう)」という漢方薬を飲んでもらったところ、その夜に、今までよりもっと激しく咳が出て、体温が上昇し、おなかが張り、のどが痛くなりましたが、翌日にはすっきりして本人が「もう治った」と思ったそうです。翌日の夕方には38℃を超えましたが、翌々日には37℃台となり、その後順調に熱も下がって後遺症もなく治りました。漢方薬がウイルスを排除するための生体のあらゆる反応を引き起こして、その

後すっきり治る、というまさに『傷寒論』に書かれた通りの経過でした。一方、こうしたカラダの反応が起こりにくい、体力の弱い方は、治療が長引き、後遺症が残りやすい傾向にあります。

新興感染症にも 即戦力として対応

漢方治療の利点の2つめは、ウイルスを直接攻撃するわけではないので、耐性菌やウイルスを作らないことです。抗菌薬の発見は菌との闘いに終止符を打つかのように思われました。しかしながら、菌も生き延びるために、抗生剤が効かないような変異を起し、その結果耐性菌が生まれます。それに対する新たな抗菌薬が開発されると、新たな耐性菌が生まれ、抗菌薬の

開発と耐性菌はたちこつことを繰り返しています。ウイルスも同じで、新しい抗インフルエンザ薬が出ると、すぐに耐性ウイルスができてしまいます。漢方薬は主に生体側に働くので、耐性菌や耐性ウイルスを作らないという利点があります。

漢方治療の利点の3つめは、既に治療薬として確立していて、治験を経る必要がないので、今後想定される新興感染症に対してもすぐに使えることです。軽症から中等症の段階で漢方治療することで、重症化を防ぎ、医療崩壊を防ぐことが可能となります。

潜伏期間にも ウイルスは増殖

多くの人は熱が出ると、「あ、コロ

ナかも」と思われると思います。今回の新型コロナウイルス感染症の潜伏期間は5〜7日(最長で14日)といわれています。この潜伏期間とは何でしょうか?これはウイルスが体内に入ってから症状が出るまでの時間を示します。細菌の増殖は細胞分裂によって起こります。すなわち1つの細菌から2つの細菌ができます。倍々と増えていくので、10回細胞分裂をすると2の10乗で1024倍になります。それに比べてウイルスは遺伝子だけ細胞に持ち込んで、増殖は人間の細胞の仕組みを借りて行います。ですから身軽に原稿を持ち込んで、勝手に他人のコピー機を使うようなものです。インフルエンザウイルスの場合、

1日で100万倍になります。潜伏期間は1.5〜2日です。新型コロナウイルスの場合はもう少し増殖速度は遅いと思いますが、仮に1日に1万倍になるとして、2日で1億倍、3日で1兆倍にも増殖します。

ちょっとした異常に 気づいてあげる

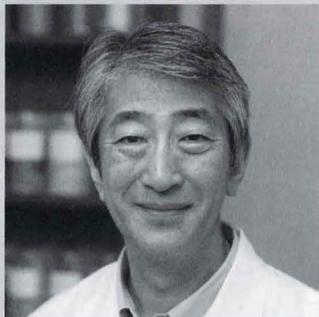
理想的な漢方治療は、この潜伏期間のうちに治療をしようということです。でも熱も出てないのに、どうして感染したことが分かるの?と思われると思います。日頃、体調を万全に整えている人であれば、自分のちょっとした不調に気がつくはずで

「未病」が出てきてしまい、すみません。次回に「未病」という言葉の説明は丁寧に致しますが、ここで覚えておいて欲しいのは、「ウイルスが感染してから症状が出る間」潜伏期間」にもウイルスはものすごい勢いで増殖しているという事実です。そして既にカラダの中ではウイルスとの闘いが始まっているのです。病

す。それがカラダの発する声です。例えば、インフルエンザで熱が出る前に、なんとなくだるいな、とかのどがいがらっぽいな、などです。ちょっとした異常に気づいてあげること、これが感染症における未病治療の要諦なのです。

原菌がどんどん増殖していつて症状が重くなる前に、漢方という援軍を送った方がいいに決まっています。新型コロナウイルスでいえば、PCR検査で陽性が分かって、自宅もしくはホテル待機している間も、どんどんウイルスは増殖しているのです。なるべく早く漢方治療を開始することが得策です。その辺りをよくわきまえている大塚医院の患者さんはPCR検査で陽性を確認する前から漢方薬を飲み始め、重症化を防ぎます。相手が強大になる前に、カラダに援軍を送ること、これが1800年前の『傷寒論』の時代からの知恵なのです。今回は「未病」とは何か?について説明いたします。

未病漢方 事始め



わたなべけんじ 渡辺賢治

慶應義塾大学医学部卒。慶應義塾大学医学部内科、東海大学医学部免疫学教室に国内留学後、米国スタンフォード大学遺伝学教室に留学。帰国後北里研究所、慶應義塾大学医学部漢方医学センター長、慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、1931年に開設された漢方専門医院、修琴堂大塚医院院長に就任。横浜薬科大学特別招聘教授、慶應義塾大学医学部漢方医学センター客員教授、奈良県顧問、神奈川県顧問、漢方産業化推進研究会代表理事、日本臨床漢方医学会副理事長、WHO医学科学諮問委員、WHO伝統医学分類委員会共同議長等を兼ねる。1900年以来、西洋医学のみだった国際疾病分類の、第11改訂(2019年)に、伝統医療が初めて取り入れられたが、2005年からプロジェクトの共同議長として長年尽力。主な著書に『漢方医学 同病異治の哲学』(講談社学術文庫)、『未病図鑑』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)、『漢方で感染症からカラダを守る』(ブクマン社)など。



渡辺賢治先生の近著「未病図鑑」